

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第8号 野菜

発行日 平成21年10月29日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4435)

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

来年の安定生産に向けた土づくりを実行
寒締めほうれんそう 生育状況に応じた管理で生育量の確保と品質の向上
促成アスパラガス 低温遭遇時間を考慮した適期掘り上げによる収量向上

1 生育概況

- (1) 果菜類や露地葉菜類の収穫はほぼ終了に向かい、出荷量は少なくなっています。
- (2) 雨よけほうれんそうは、気温の低下とともに生育は緩慢となっていますが、継続して出荷が行われています。寒締めほうれんそうの種は10月中旬まで行われ、現在生育中です。
- (3) ねぎの出荷は、稲刈り作業との競合により一時的に少なくなりましたが、現在はほぼ順調に出荷されています。

2 技術対策

(1) 栽培跡地の整理と来年への準備

栽培が終了した圃場内の作物残さは適切に処分し、翌年の病害虫発生の原因とならないようにしましょう。また、本年の栽培状況を振り返り、来年の安定生産に向けた土づくりを実践しましょう。(右図参照)

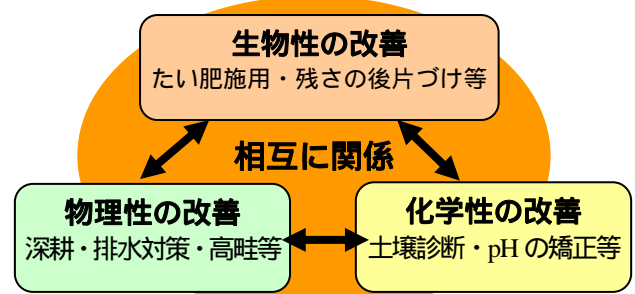


図1 土づくりで重要な三つの性質

(2) 野菜畑での施肥管理について

県内の野菜畑では、可給態リン酸や交換性カリウムなどの肥料成分において、土壌改良目標値を満した圃場が多く、中にはリン酸を無施用でもよい水準まで蓄積している事例もあります。

また、最近の肥料価格は、リン鉱石やカリ肥料の原料価格が上昇し、今後も高価格で推移すると見込まれることから、肥料コスト低減に取り組むことが重要です。

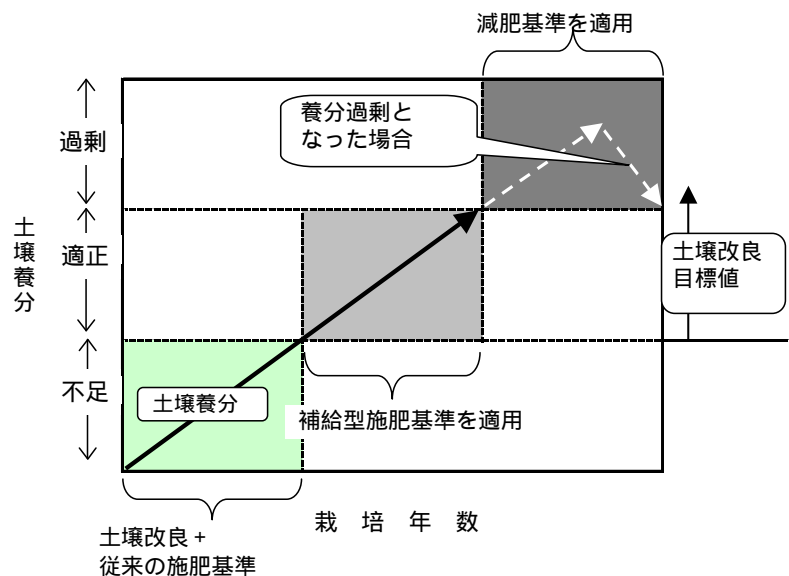


図2 土壌養分に応じた施肥管理基準の適用

施肥管理にあたっては、土壌改良目標値を満たした圃場では、作物による肥料成分の吸収量や、浸透水による養分の溶脱量など、「土壌から持ち出された肥料成分を施肥で補給する」補給型施肥基準を適用するとともに、土壌診断結果によって土壌養分の過剰が明らかになった場合には、減肥基準に基づき施肥量を低減することをお勧めします。

(3) 寒締めほうれんそう

本年度の秋季の気温はほぼ平年並みに推移しています。生育が必要以上に進みすぎないようにハウスの開閉により生育を調節します。従来多く栽培されていた「朝霧」より伸長が遅い品種(「寒味」「冬霧7」など)も導入されていますので、品種に応じた管理を心がけましょう。

十分な低温に遭遇する前に収穫すると品質が劣る事が懸念されます。県内の主要地点における寒締め開始可能日(地温が8℃以下になり糖度が上昇し始める時期)は、概ね12月上旬と考えられますが、年次により大きなズレがありますので、出荷開始時には最大葉の葉柄の絞り汁のbrix値が8°程度以上になっていることを確認して出荷しましょう。

(4) 促成アスパラガス

地上部から貯蔵根への養分転流は茎葉が完全に黄化するまで続いています。茎葉の刈り取りや掘り上げは急がないようにしましょう。

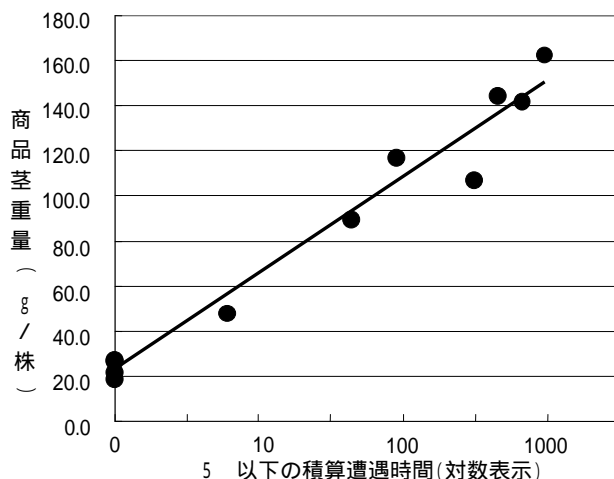


図3 掘り取り前根株の低温遭遇時間と商品茎重量との関係
(商品茎: 5g以上の若茎)

また、十分に低温に遭遇した株を利用することで、収量が増加しますので(左図参照 平成18年度試験研究成果「アスパラガス年内どり作型における1年養成根株の掘り取り時期」より)5℃以下の低温遭遇時間を考慮して掘り上げ時期を決定しましょう。

昨年度よりは、5℃以下の遭遇時間はやや多くなっていますが、地上部の刈り取りは十分茎葉が黄化してから行うようにしましょう。

10月26日までの県内の主なアメダス地点の5℃以下の低温遭遇時間は次表のとおりです。

表 5 以下積算遭遇時間(10月26日まで)

アメダス地点	二戸	奥中山	盛岡	北上
5℃以下積算遭遇時間	36	80	29	7
90時間到達見込み*	11月9日	10月29日	11月14日	11月14日

* 今後、昨年と同じ気象推移となった場合に5℃以下遭遇時間90時間(株重800gの株から100gの収量が見込まれる)に達する月日

栽培面積が大きい場合には、掘り上げ作業及び伏せ込み床の準備は計画的に進めましょう。

伏せ込み後に、伏せ込み床内の温度を急に上げると収量が少なくなる場合があります。

1週間程度は無加温とし、その後、徐々に温度を上げるようにしましょう。

ハウス内の保温対策を万全にし、加温コストをできるだけ低減しましょう。

農作物技術情報の21年度定期発行は今号で終了となります。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

9月15日～11月15日は秋の農作業安全月間

「気をつけて」朝のひと声で 初心忘れず ゆとりの仕事